特 集

苦難を乗り越え、地域・サポーターと共に飛躍を目指す 釜石シーウェイブス

釜石シーウェイブスRFC(以下SW)は、伝統ある新日鉄釜石ラグビー部のDNAを継承し、日本初の地域共生型クラブチームとして2001年4月に創設された。特に08年以降は「強い」「愛される」「地域に誇りを持つ」の3ビジョンのもと、チーム力強化やサポーター組織、資金面での基盤強化を進めてきた。しかし、創設10周年を迎え次の10年に向けた体制強化の最中、2011年3月に東日本大震災に見舞われる。未曾有の大惨事に一時はSWの活動継続も危ぶまれたが、地域をはじめ全国のサポーターからの温かい支援と志に支えられ練習を再開し、昨シーズンも釜石ラグビーの伝統である「粘り強く諦めない姿勢」を見せた。本特集では、地域復興のシンボルとして前進を続けるSWの歩みを紹介する。

V7 時代

準備委員会の風景

「ラグビーの聖地」で、新たな可能性を求めてクラブチーム化を決断

SWの前身である新日鉄釜石ラグビー部は、1978年度から日本選手権7連覇を達成した。これは今でもラグビー界で語り継がれる偉業で、その当時釜石は「ラグビーの聖地」として全国の注目を集めた。

その後、新日鉄ではスポーツ事業運営の見直しを図り、所有から支援へと方針を転換し、2000年11月にSWの創設を発表。クラブチームという新しい取り組みで、新日鉄の枠組みから出ることになったことで、チームが弱体化するのではないかと懸念があった。そこでSWは発表直後に、市役所や商工会議所、青年会議所など市内各団体の代表者で構成する準備委員会を立ち上げ、地域と企業が一緒になって育て支えていく「市民のチーム」であることを根気強く地域に説明し、新たなチームの運営方法を市民と共に検討・模索した。

新日鉄釜石ラグビー部時代に12年間、巨漢FWとして活躍し、クラブチーム創設時は監督を務めていた、現ゼネラルマネジャー(GM)・理事の高橋善幸氏は、クラブチームに移行した理由を語る。

「経営方針や活動費など、従来の企業チームの制約を超えた発展的なチームづくりを目指し、クラブチーム創設に踏み切りました。何から手をつければよいか手探り状態でのスタートでしたが、日本初の地域共生型クラブチームとして、チーム力強化、サポーター、支援組織などの基盤づくりに取り組みました」

ゼネラルマネジャー・理事
高橋 善幸氏

もう一度国立へ！市民の願いが込められた大漁旗が復活

準備委員会の発足直後、地域のチームとして市民からの支援が拡大する大きなきっかけとなったのが、社会人大会へのクラブチーム参戦を可能にするルール改定を求める署名活動だった。準備委員会のメンバーが奔走し、2日間で岩手県内外から約1万8000人の署名を集めて日本ラグビー協会に提出し、ルール改定を実現。この活動を通して、市民が単なる応援ではなく、自分たちのチームとして支えていく、支援することで強くできるという意識が浸透したと高橋GMは振り返る。

そして2001年4月、正式にクラブチームが発足。直前の2月に東日本チャレンジリーグ最終戦に負け、関東社会人1部(現トップイーストリーグ)に初めて降格するという前途多難な船出となったが、6月には釜石市だけでなく全国から約3000名のサポーター(会費制)を獲得し、チームの新たな挑戦が始まった。2004年にはトップリーグ昇格に挑戦するチャレンジマッチにも進み、クラブチームとして初めて日本選手権に進出。「北の鉄人」の存在感を示した。

またそうした努力の過程で、V7時代に国立競技場の応援シンボルとなった大漁旗が復活する。クラブチーム創設時から事務局受付に掲げていた大漁旗が日本選手権の応援席で振られ、今では漁船によって異なる色鮮やかな大漁旗が試合会場の風物詩となっている。そこには、「鉄と魚とラグビーの街・釜石の代表として、もう一度国立競技場で試合ができる強いチームになってほしい」という市民の願いが込められている。

苦難を乗り越え、
地域・サポーターと共に飛躍を目指す
釜石シーウェイブス

子どもたちとのふれあい・タグラグビー風景

提供：epa 通信社
提供：epa 通信社
震災後の支援活動（上段）と津波がひいた後、がれきの廃墟と化した当時の釜石市中心部（下段）

そして震災。SWだからこそできる地域支援に取り組む

2011年3月11日14時46分、宮城県沖でマグニチュード9の巨大地震が発生、その約30分後、釜石市を大津波が直撃した。この東日本大震災でSWの選手2名の家族の住居も被害を受けた。電気・ガスなどのインフラが機能不全に陥り食糧も不足する中で、その夜、選手たちと家族はクラブハウスに集まり、職場の復旧を含めた生活基盤確保を最優先しながら、しばらくそこで共同生活することを決めた。そして被災2日目、老人介護施設・事務局長からの支援要請を受けて、選手たちは電気・燃料が確保できるまでの1週間施設に通い、車椅子生活者の介護（停電下の階段移動）など献身的な支援活動を行った。チームのモラルリーダーでもある佐伯悠キャプテン（フランカー）は当時の思いを語る。

「ラグビーどころではない街の被害状況を目の当たりにして改めて、クラブチームは地域の生活基盤があってこそ成り立つものだと痛感し、地域のためにできることをやりたいと思いました」

選手たちは自主的にボランティアセンターに登録して、全国から届く食糧などが集まる市の物資集配場での運搬作業を開始。その活動は震災から1カ月間毎日欠かすことなく続けられた。

支援活動を続ける中で、選手やスタッフは市民から「練習をしなくていいのか」「試合はいつなんだ」と声をかけられる。4月に入ると支援活動を継続する傍ら、選手たちもチームの今後を考えるようになった。選手・スタッフ・支援者で話し合い、周りの状況が許せば5月初旬に練習を再開することを決め、プロ選手は個々にトレーニングできる環境づくりを、仕事を持っている選手たちは自職場の復旧作業を優先しながら自主トレを行うこととした。また、釜石市内に設けられた主な避難所を訪問して回った高橋GMは、長期化する避難所生活に、子どもたちが時間や体力を持て余していることに気づく。

「選手たちと話し合って自分たちにしかできないラグビーやスポーツを通した支援活動をやろうと決めました」（高橋GM）。幸い仮設住宅用地とならず、4月になって芝生も青くなった松倉グラウンドに子供たちを招き、タグラグビー教室を開催。選手たちが各避難所との送迎を行い、一緒に風呂に入りカレーを食べた。その中で見られた子どもや市民の笑顔にチーム再始動への勇気をもらったと高橋GMは振り返る。

佐伯 悠キャプテン
（フランカー）

提供：epa 通信社

招待試合　KSW 対 関東学院大学（59 対 17）

「スクラム釜石」発足発表の記者会見

菅野 朋幸選手
（ウイング）

神田 佑樹選手
（プロップ）

地域・サポーター・OBに支えられてSW再始動！

そして5月3日、松倉グラウンドでのミニキャンプで公式練習がスタートした。関東学院大学からの申し入れで、5月15日、盛岡南競技場で第46回IBC杯招待試合(復興チャリティマッチ)を開催。4月に決めたこの試合がチームの練習再開への大きな励みにもなっていた。試合は59対17でSWが快勝、選手たちは試合ができる喜びを噛み締め、応援に駆けつけた約2500人の観客の目に万感の涙が溢れたノーサイドだった。また6月11日、震災後初のホームゲームとなる復興祈願「釜石ラグビッグドリーム2011」が、トップリーグのヤマハ発動機との連携で実現。5対76と大差で敗れたものの、強者の胸を借りる意義深い試合となった。SWのスポンサーであり、2007年4月に結成されたシーウェイブス釜石応援団副団長の中田薬局・中田義仁社長は語る。

「少子高齢化が進む釜石で私ができる貢献としてSW応援団を設立しました。震災後の練習再開と復興試合で市民も勇気づけられたと思います。SWは釜石の宝であり希望です」

一方、新日鉄釜石ラグビー部OB有志もSWの支援組織「スクラム釜石」を発足させた。5月の招待試合や6月のホームゲームには、V7時代を支えた松尾雄治氏や名監督として名を馳せた森重隆氏をはじめ、全国からOBや元日本代表選手たちが駆けつけた。

シーウェイブス釜石応援団副団長
中田薬局社長 中田 義仁氏

逆境の中で2011年のシーズンも諦めない姿勢を見せる

いよいよ2011年のジャパンラグビー・トップイーストリーグ・ディビジョン1が始まった。奇しくも震災後ちょうど半年の9月11日に秩父宮ラグビー場で開幕した初戦は、リーグ参戦以来初となる完封試合(41対0)で快勝し、スタンドからは「釜石コール」が沸き上がった。その後、地元開催で勝利した10月23日の東京ガス戦(第5節)は、選手・市民の一体感に包まれ、地域クラブチームの原点を改めて実感するひとときとなった。新人として2010年初めてスタメン出場し、スクラムで存在感を見せているプロップの神田佑樹選手はシーズンの印象を語る。

「スタンドで振られている大漁旗を見て心強かったですし、応援の皆さんとの距離の近さを感じました。試合に出てこのチームの一員であることの喜びと誇りを実感し、将来はチームの中心選手になれるようにさらに努力しようと心に誓いました」

第8節の試合前日に2位のキヤノンが勝ち、その段階でトップリーグ昇格へのチャレンジの道は断たれたが、最後までひたむきに戦い抜く姿を地元の市民に見せ続けた。ウイングとして果敢にトライを狙ってきた菅野朋幸選手は「6勝3敗の第4位に終わりましたが、今シーズンはすべての試合で選手全員、最後までしがみついてでも諦めず闘う姿勢を見せたい、伝えたいという強い思いがあり、その経験は自分の財産にもなりました」とシーズンを振り返る。

応援団の中田氏は「震災後、市民の皆さんに少しでも元気になってもらいたいという気持ちから、仮設住宅向けにシーウェイブス通信を発行し、地元開催試合への応援を呼びかけました。最初は少なかった大漁旗もシーズン後半は20本を超えるようになり、チー

苦難を乗り越え、
地域・サポーターと共に飛躍を目指す
釜石シーウェイブス

サポーター募集の WEB ページ
http://www.kamaishi-seawaves.com/supporter/fanclub.html

二十数本もの“大漁旗”が舞う応援席

リーグ戦　KSW 対 日野自動車（46 対 8）

ムも例年以上に体を張って最後までやり抜くラグビーを見せてくれました」と語る。

また、プロとアマチュア（仕事とラグビーを両立する選手）が混在し、普段は練習・試合以外で一緒にいる時間が少なかった選手たちが、クラブハウスでの避難生活やボランティア活動を通じて時間や思いを共有したことでチームの一体感が強まった。

「やればここまでできる、まだまだ変われるという精神力と自信が生まれ、だからこそ今後の課題も浮き彫りになりました」（高橋ＧＭ）。

２０１２年、地域への恩返しのためにもトップリーグ昇格を目指す

震災後危惧されたクラブ運営も、２０１２年を迎えて、サポーター（個人会員）が震災前より１０００人も増え、スポンサーを降りる企業もないなど、チーム存続への明るい兆しが見えた。

「昨シーズンはあの困難な状況でさまざまな支援をいただき、ＳＷは釜石と共にあることを強く感じました。今年はぼくたち全員がその恩返しをする気持ちでチーム力強化に取り組みます」（佐伯キャプテン）。

２００６年から公式スポンサーとしてＳＷを支援してきた農水産加工冷凍食品メーカーの阪神低温（株）は、自社の釜石工場が甚大な被害を受けた中でもＳＷへの支援を続けている。

阪神低温（株）釜石冷凍工場
工場長 **和田 亘**氏

シーウェイブスカラーの工場外観

「当社も被災してスポンサーは降りるしかないかとの話も出ましたが、私自身、ＳＷ選手がボランティア活動や試合で頑張っている姿を見ていたので、支援継続を本社と決めることができて嬉しかったです。当社の釜石工場も現在は生産を再開していますが、実は工場の外壁を青と黄色のＳＷカラーにして、新生釜石に向けてＳＷや地域と共に頑張る気持ちを新たにしています。ＳＷには、鉄の街・釜石にふさわしい『鋼』のような強いチームになってもらいたいですね」と、同社釜石冷凍工場・和田亘工場長は今後の期待を語る。

現在ＳＷでは、今シーズンの運営・事業計画の策定に取り組んでいる。運営スタッフはこの時期が最も忙しいと高橋ＧＭは言う。重要な選手補強については、選手の引退後の生活も視野に入れて地元企業の中で雇用先を確保・拡大していくことが、地域密着型クラブチーム運営のキーとなる。また、高校卒業後にＳＷに加わる地元出身の選手が活躍する基盤づくりも重要だ。現在、釜石市内にラグビー部を持つ高校は2校あるが、ＳＷでは地域のラグビー人口を底辺から支える活動として、従来からのタグラグビー教室やジュニア・中学生ラグビーへの支援に加えて、クラブのジュニアチーム編成も視野に入れた育成計画を検討し始めている。高橋ＧＭは今後の意気込みを語る。

「順位が上り運営基盤も強化できた今シーズンは、結果を残すチャンスの年です。ＳＷの強みである真正面からぶつかるプレースタイルに、僅差の試合をものにする的確な判断力を加え、是非ともチャレンジリーグを突破してトップリーグ昇格を果たしたいと思います。ラグビーはボールゲームですがタックルなどコンタクトプレーでの格闘性も高く、選手一人ひとりの気持ちや動きで80分間のストーリーが決まるスポーツです。ラグビーに詳しくない方も、楽しんでいただけると思いますので、今シーズンは是非試合会場にお越しください！」